

『げきじょうのひ 井 序と云い切れず』

樋口ミユ

ツルコ

まぼろ

父 屑

新人の人間
シン

レジスタンス

ドラアグ・ト書き

窓から月明かり。

青白い光。

青白い影。

月の裏側表側。

見える影。

見えない光。

こんなに影が濃いことから、今夜は満月だろう。

まぼろ、それを開く、

と。

影、暗闇から、
聞こえてくる。
呼吸。
吸って、吐く。
足音。
右、左。

浮かび上がるツルコ。

赤ん坊を抱いて。

歩く。

歩く。

歩く。

ツルコ 胸、踊る………違う。

ツルコ 胸、膨らむ、違う、胸、なでおろす、違う。胸……ムカつく、胸がたつ、
胸にくる、違う、胸、不安、胸、無力、胸、困惑、

ツルコ ……違う。

ツルコ 胸……

ツルコ 胸、

ツルコ 胸、

歩く。

歩く。

歩く。

ツルコ 欲望、失望、絶望、嫌悪、恐怖、後悔、嫉妬、空虚、服従、軽蔑、憤慨、
自責、不信、恥、悶絶、落胆、執念、憂鬱、躊躇、驚愕、興奮、愛憎、快樂、
歓喜、善意、悪意、反感、共感、楽観、悲観、勇気、羨望、慈悲、慈愛、尊敬、
愛、幸福、希望、

よく見ると、

ツルコのななめ後ろに、

もうひとつ、

影が歩く。

歩く。

歩く。

歩く。

よくよく見ると、

いつのまにか、

まぼろも、

ツルコのななめ後ろ、

影とは反対側に。

歩く。

歩く。

歩く。

ツルコ 胸、胸、胸……

赤ん坊、泣いた。

ツルコ、立ち止まる。

泣いている赤ん坊を、

じっと見つめて、

ツルコ ……いたつ……………

思わずこぼれた。

ツルコ いたい……？

その言葉を、噛み締めた。

ツルコ 胸、痛い。

そして、赤ん坊を抱きながら、
懐から分厚いノートとペンを取り出し、

ツルコ 胸、痛い。

書きつけた。

ツルコ 胸、痛い。胸、痛い。胸痛い、痛い、痛い、泣き声が、

ツルコ 痛い。

書き終わると、
ツルコ、再び歩き始める。

ツルコ 赤ん坊は、泣く。

歩く。

歩く。

歩く。

ツルコ 生きのびたくて、泣く。

歩く。

歩く。
歩く。

ツルコ 泣いている間は、

歩く。
歩く。
歩く。

ツルコ 生きている。

歩く。
歩く。
歩く。

ツルコの呼吸と足音。
いつのまにか、
ただひとり。

ツルコはひたすら、

歩く。
歩く。
歩く。

父 なんや、灯りもつけんと。

声が出た。

まぼろ、思わず。

まぼろ 灯りはええ、つけんとって。

真夜中の食卓。

小さなテーブル。

椅子がふたつきり。

そのひとつに、まぼろは座っている。

父 暗いやろう。

まぼろ 月が在る。

父 いうても暗いで、灯り、

まぼろ ええねん。

父 つけるで、

まぼろ このまま……！

父 灯りつけたらあかんのか？

まぼろ ……

父 おっきいトランク、見えてしまうからか？

父、ゆっくりと。

まぼろの向かいの椅子に座る。

父 そうか。やっぱり行くか。

まぼろ ……お父ちゃんは、いつもそうや。

父 いつの間にかこんな大きくなったんか。時間なんか、ほんま、あっちゅう間やな。

まぼろ 全部分かってるのに、知らんふりして声かけてくる。

父 かくれんぼとおんなじや。

まぼろ かくれんぼ？

父 くすくす笑いこらえて、かぶった布団が揺れてんのに隠れてるつもりのことちやいお前や。こっちは知らん顔して、おかしいなあ、おらんなあ、どこや、どこおんねん、言うたら……また布団がくすくす揺れる。

まぼろ 子どもの頃は、なんでも大成功やってん。

父 思い切り布団めくったら、ケタケタ笑って、

まぼろ なんでああいうとき「バア」って言うんやろ。

父 子どもやからな。

まぼろ 子どもか。

父 お前が見つけて欲しい時に、ちゃんと見つけたる。

まぼろ お父ちゃん、なんもかんも分かってんのに、うち見つけるたんびに驚いたふりして、親て結構大変やな。

父 ふりちやう。

まぼろ ん？

父 お前がただ笑ってる。それが、こんな嬉しいもんかって、自分に驚いてた。

まぼろ ……止めへんの？

父 お前の成長は誰にも止められへんやろう。

まぼろ お父ちゃん。

まぼろ、父を見た。

まぼろ 戦争なんかなかったって、教えられた。

父 なかったで。

まぼろ 緑はいつともきれいで、

父 そうや。

まぼろ 空気は澄んでる。

父 そうや。

まぼろ 嵐も災害もない。

父 そうや。

まぼろ 川はずっと穏やかに流れてる。

父 そうや。

まぼろ 事件いうたらチャリンコのサドル隠すイタズラくらいのもんで、

父 あれ、隣のフクが常連や。

まぼろ あいつロクなことせん。

父 お前、ようどやしてた。

まぼろ、少し笑った。

まぼろ ここは安全。ここはあつたかい。

父 うん。

まぼろ 外には、なんにもない。

父 うん。

まぼろ 人が生まれへん荒野が広がってるだけ。

父 うん。そうや。

まぼろ、言葉にするかどうかを少し考えてから。

まぼろ ほんまに？

父 ……

まぼろ お父ちゃんを疑ってるんちゃうねん。

父 分かってる。

まぼろ お父ちゃんが信じてること、このみんなが信じてること、きつとほんまや、ウソやない。でもほんまって、

まぼろ、それを、ノートを、テーブルの上に。

まぼろ いくつもある。あるって、思ってたもたら、もう、在る。

窓の外、月夜の光を横切って、鳥が飛んだ。

まぼろ うちが何を信じるんか、うちのほんま、探しに行こうと思う。

父、テーブルの上のノートを見た。

父 誰がお前を止められるいうんや。

父、丁寧に触れた。

父 えらいボロボロなって、お前、こればかり読んでたもんなあ。

まぼろ 子どもんころは、字、分からんかった。

父 よう見つけたで、あんな、

まぼろ 食器棚のかませにしてあった。

父 そうや。ちっこい体で、

まぼろ 食器棚の足もとから引っこ抜いた。

父 そやからあれずっと斜めのまんまや。扉開けたら皿滑って出てくる。

まぼろ お父ちゃん、いっつも割ってた。

父 こいつの高さがちょうど良かったのに、戻しても戻してもお前すぐ自分の部屋に持っていくから。代わりのもん探すのむずかしねん。微妙なすきまに、

絶妙な高さの、

まぼろ これもかくれんぼと同じか？

父 ……

まぼろ 分かってんのに知らんふりして、お父ちゃんが置いた。

父 ……

まぼろ もし、うちに見せたなかったら、さっさと焼き捨ててたはずや。

父 別に見てもかまへんもんや。なんもおもろあらへんけど。ただのお話。お母ちゃんが書いたお話、ふいくしよんいうやつ。

まぼろ お話か。

父 お話や。

まぼろ 作りものか。

父 作りもんや。

まぼろ 想像か、

父 妄想や。

まぼろ つかめるか。

父 つかむようなもんちゃう。ひっちゃかめっちゃかの、無茶苦茶話や。お母ちゃんが、お前、寝かしつけるために書いただけのもんや。

まぼろ 覚えてへん。

父 そらそうや。生まれた時のことなんか、誰も覚えてない。
まぼろ お父ちゃん。
父 うん？

まぼろ、ボロボロのノートを胸に抱いた。

まぼろ 子どももな、いつの間にか知らんふり覚える。

まぼろ だから巣立つ前に、1回だけ本気で聞くな。

まぼろ これは、作り話やなくて、

まぼろ お母ちゃんのこと……お母ちゃんのことを書いてあるんやろう？

ブツブツブツブツ

音がする。

ブツブツブツブツ

ツルコの声 すみません。

ドンドンドン

ツルコの声 誰かいるなら。

ドンドンドン

ツルコの声 扉を開けてください。お願いします。

ドンドンドン

ツルコの声 屋根のてっぺんにバツテン掲げてありました。それは救済の意思表示。遠くからでも見えました。だからそれ目指して歩いてきました。開けてください。誰かいるなら、

ドンド

ツルコの声 ん？

ツルコの声 そうか。誰もいないのなら開かないのはまさに。

ツルコの声 そうか……壊すか。

その時、

父の顔がふっと若返り、

椅子から立ち上がる。

赤ん坊を抱き、右足で扉を蹴破ろうとしたその時だった。

ツルコ ……っ！

扉は、そっと半分ほど開けられ、

屑 あなたは……生身でしょうか。それとも、影、幻でしょうか？
ツルコ 私のことはどうでもいい。赤ん坊を生き延びさせたい。

覆っている布をはらりとけると、
眠っている赤ん坊の顔があらわれた。

屑 こんな……

男は、

屑 こんな世界なのに、生身は……生まれてくるんだ……

思わず祈りたくなる、が。

ツルコ 泣くな。ウザい。もっと泣いてしまおうだろう。

屑 あ。

ツルコ 申し訳ない。言い方がこれで合っているのか分からない。助けてもらいたい。迷惑はかけない。何もしない。すぐに出ていく。ただ赤ん坊のための食事をつけてもらいたい。

屑 ……はい。

屑はひたすらうなづく。

ツルコ いいだろうか……？

涙が込み上げてしまいそうになるのを、
まるで止めるようにうなづく。

ツルコは不思議に見る。

屑 はい。はい。はい……

なぜそうなるのか、それは屑にしか分からない。

屑 もちろん……

半分だった扉は大きく開かれる。

ツルコはテーブルの上に赤ん坊を寝かせ、
ドカリと椅子に座り、

ツルコ ぬるま湯に砂糖を大さじひとつ、もらいたい。

屑 はい。

ツルコ 赤ん坊はまだ牛乳は飲まないから。

屑 はい。

ツルコ それから清潔な布。

屑 はい。

ツルコ 吸い付けるものを。哺乳瓶がなくて。

屑 はい。それからあなたに。

あなたとは、私か？と、ツルコ、屑を見た。

屑 あなたにはおにぎりを。

ツルコ いや、私は、

屑 用意します。

ツルコ それはありがたいが、

屑は準備のために台所に引っ込んだ。

ツルコ 私はおにぎりは……

ツルコ、何かが気になり背後を振り返った。
窓の外、もしかしたら一緒に歩いていた影が、
のぞいているかもしれないが、
ツルコには見えないだろう。

ツルコ 私は、

ノートとペンをテーブルにほおり出し、

ツルコ どうして、

泣いている赤ん坊をじっと見て、
痛んだ胸に触れてみる。

ツルコ ……なぜ、

ツルコ、ぎこちなく、赤ん坊を揺らす。
必要なものを抱えて戻ってきた屑は、
ツルコのあやし方にギョツとする。

ツルコ なにか、

屑 あ、あの、

屑、手を差し出した。

ツルコ 得意なのか？

屑 いえ、そういうわけでは、ただ、

ツルコは赤ん坊を渡す。

ツルコ ただ……

屑、うまくはないが、赤ん坊を抱いて、砂糖お湯をガーゼに浸して飲ませる。

ツルコ 慣れてはいないが、私なんかより断然いい。
屑 や、そんなはつきり、あ、それを、

屑、テーブルの上のおにぎりに目をやる。

屑 どうぞ。

ツルコ、おにぎりを見た。

ツルコ 私には必要ない。

屑 でも食べなきゃ、その、母乳が、
ツルコ 私の子ではない。食べることが母乳には繋がらない。それよりも、

男、赤ん坊を抱きながらも、皿をツルコの目の前に突きつけた。

屑 母乳のためだけじゃない。食べなきゃもたない。古い米できっと美味しくはないだろうけど、食べてください、一口だけでも、
ツルコ 減ってはいない。

屑 減ってないって、どこから歩いて来られましたか。

ツルコ 旧市街地から。

屑 ずいぶんな距離です。

ツルコ 減っていないものを減らせない。

屑 それでも食べてください。

ツルコ お気になさらず。

屑 食べてください！食べてもらわないと……！！

ツルコ 私が食べることが、ここの宗教上、何か特別な意味でも？

男は、突きつけていた皿を、テーブルに置いた。

屑 関係ありません。僕は宗教を持ちませんから。
ツルコ けどここは、

屑 誰もいないことをいいことに、逃げ込み住み着いているだけです。逃げて隠れて何もかも放棄して、この世界をやり過ごして、

ツルコが、じっと屑を見る。

屑は、その目から逃れられないような気がして。

屑 「太陽の船」に、乗ろうと……

ツルコ ……

屑 信じてはいけませんか。バカみたいですか。

ツルコ それはあなたの自由だ。私にはなにも関係がない。

屑 僕は……屑です。

ツルコ くず。

屑 ここに来てから自分で名付け直しました。

ツルコ 名前を？

屑 ただの屑。もとの名は土に埋めました。どうしようもない屑なので。自分で

屑と名乗っても、呼ぶ人はここに誰もいないけど。

ツルコ 屑さん。

屑、驚いたようにツルコを見た。

ツルコ ただの屑さん。

屑 はい。

ツルコ ただのさん。

屑 あ、ただのはなくていいです。

ツルコ 屑さん。

屑 はい……

ツルコ どんな名でも、あった方がいい。

屑、項垂れた。

屑 すみません……無理して食べなくていいです、おにぎり……
ツルコ 食べる、なのか、食べるな、なのか、
屑 遺体から奪って生きのびている屑の僕が罪悪感で握ったおにぎりです。

ツルコ、屑を見つめた。

屑 すみません。そんなものを、すみません。生身がここに来るのはあなたが初めてです。だから、どうしてもおにぎり出したかった。奪い合うのが嫌で逃げてきたのに、結局、剥ぎ取って奪って生き延びている……

屑、窓の側に立った。

屑 聞こえますか？

ツルコ、屑の視線にツられて、真っ暗な窓の外を見た。

ツルコ 川の音……旧市街地と繋がってる？

屑 流れてきます。いろんなものが。川が真っ赤になることもある。そんな日は、曲がりくねったカーブのところ引っかかって何日も留まる。

ツルコ ……遺体が？

屑 見ていられなくてカーテンを閉める。だけど真夜中に扉を叩く風が、影幻が叩いているように思えて、だから土に還そうと、

ツルコ それで埋葬する前に必要なものを剥ぎ取り闇市で売りさばく？

ツルコ、屑を見た。

屑 僕は屑だけど、まだ生身で、だから……ありがとうと手を合わせて……自分に吐き気がする……

ツルコ 分からない。

屑 え？

ツルコ 埋葬とおにぎり私。どう関係が？

屑 関係……関係は、ただ、助けたくて、僕は、せめておにぎりを、
ツルコ だから分らない。

屑 ……奪う自分じゃなくて……誰かを、助けられる自分でいたい。だから、
ツルコ だから。

屑 だから……

ツルコ だか、あ。

屑 え。

ツルコ 許されたい。

屑、凶星でうつむいた。

いつのまにか赤ん坊は眠ったようだ。

屑はのろりとテーブルの上に赤ん坊を置く。

ツルコはじっと見つめ、理解した。

ツルコ 砂糖をいただいた。助かった。ありがとう。赤ん坊も眠った。助かった。

ありがとう。お礼が遅れて申し訳ない。

屑 お礼を言われたいわけじゃない、そういうことじゃ、

ツルコ そういうことじゃない？ 難しいな。

屑 いや、そういうことなんだろうか、

ツルコ どっちだ。

屑 屑だ。やっぱり僕は、

テーブルの上のおにぎりを手のひらに。

ツルコ おにぎりは、食べるふりくらいしかできない。

屑 ……え？

ツルコ 味わうことができない。期待に応えられない。申し訳ない。

屑 できない……？

ツルコ 私は人間ではないから。

ツルコ 私は、

ツルコ ニューラルデバイス回収屋プロダクト。TRUTHCO、ツルコ。火花で崩れ
焼けこげたそのアトを片付け、私はあらゆる人々の最後の言葉を記録する、

人間 TRUTHCOさん。

声に振り向く。

ツルコ 新人の人間。

人間 その呼び方、定着してしまいましたか。

ツルコ とてもわかりやすい。

分厚いノートを抱えた新人の人間。

新人だがずいぶんと、年老いている。

人間 次の仕事のお時間です。

ツルコ 知ってる。

エアーの扉を開けて乗り込む。

運転席にツルコ。

助手席に新人の人間。

後部座席にノートを持ったまぼろが乗り込む。

ツルコ 運転オート。地区22まで。

発車するその瞬間、

もう一つの影、シンが後部座席に乗り込んだ。

ツルコだけが、シンのことは見えない。

人間 ああ……君イ……いつまでも消えちゃくれないんですねえ。

シンは、曖昧に笑って、

シン 僕はあなたの戒めです。

人間 それを引きずっている間はまだまだですねえ。

ツルコ 人間、その独り言は趣味か。

人間 すみません。アタシの過去の後悔、ずっと引き連れて生きてんです。

ツルコ 人間、意味がわからない。

人間 TRUTHOさんもその呼び方どうにかならないでしょうかねえ。

ツルコ 人間の相棒を持つ回収屋なんて他にない。今はもう軍隊も傭兵もやらない。そもそも回収は回収屋がやる。

人間 さらに細かく分業が進みましたねえ。

ツルコ だからここで人間は人間だけ。わかりやすい。

人間 なるほど。

人間は、分厚いノートを開いた。

ツルコ すぐに着く。

人間 エエとですね、さっきのことを書いておきたくて……

カリカリとノートに書き付ける。

エア―は音もなく進む。

カリカリと、その音がやけに響く。

ツルコ 回収記録データは揃っている。

人間 外に漏らしたりしません。そういう条件でこの会社にいますから。これは単なるアタシの記憶です。書いて刻み込む。手で書くのが重要で、

ツルコ 古い時代の風習は時間がかかる。

人間 そりゃ TRUTHOさんのデータが正確でなによりですよ。アタシはねえ、その時に感じたギチギチしたこと、ニガニガしたこと、マガマガしたことを、書き刻みつけておきたいんです。

ツルコ なにを言ってるかなにもわからない。

人間 感情を簡単にオートにしないためでもありますねえ。

ツルコ おかしなことを言う。人間は複雑なオートだ。

人間 エエと、今の人間は、

ツルコ 人間全般。

人間 アタシじゃなくて全体ね。はい。で、例えば？

ツルコ 殺し合うのに助け合う。ルールを作って破る。大好きなのに大嫌いと言う女子高校生。

人間 人の心は暗闇の森ですから。

ツルコ 意味がわからない。

人間 光を当てないと見えない。

ツルコ 意味がわからない。

人間 暗闇にうじやうじや蠢いているのは小さなミミズか、果たして猛獣か、もしかしたらこの世のものとは思えない怪物が潜んでいるかもしれません。

ツルコ なんの話をしている。暗闇の森なんてどこにもない。

人間 それをメタファーと言うんです。

ツルコ 意味がわからない。

人間 さっきね、FRUITCOさんが回収。182をつけたあのあれ、

ツルコ ガラスの欠片。ガラス製タンブラー。

人間 昔の、知り合いがね、バカラのタンブラーで毎朝ミックスジュースを飲む生活をするんだって言って、あれ、2019年だったなあと、

ツルコ 人間の思い出と、さっきの現場とはなにも関係がない。そしてバカラはジュースを飲むようなグラスではないし、No.182はバカラの欠片ではない。

人間 はい。何の関係もないのに結びつける。繋げる。たったカケラ一つから、アタシの心は、その友人の、笑う顔、居酒屋の音楽、酒の匂い、つまみの味、色、外の雨の冷たさ、おしぼりで手を拭く手触り、くだらない会話……くだらない、ホント、泣けるくらいくだらない昔が頭をよぎって……エアールに乗り込み、ノートを開いて、今、こんな時にこんなくだらないことを思い出すアタシの暗闇の森には一体どんな卑しい生き物が住んでいるのか……だけど、待て、と、この指に……問いかけます。

後部座席から、シンが手を伸ばして。

人間の右手をそっと握って動かす。

シン くだらないことから、忘れていく。

シン くだらないのその向こうは？ その向こうにはなにが見える？

シン くだらない、日々。暮らし。営み。生活。人。誰か。

シン たくさんの誰か、いろんな誰か、暮らしていた誰か、

シンの手が、人間の手からそっと離れていく。

人間 ……くだらないとは、愛しいものです。

ツルコ どっちなんだ？

人間 ガラスのカケラを見て、ここにもくだらない愛しい何かがちやんと在った、在ったのに……と、アタシは思ったんです……

ツルコ 終わりか？

人間 どうしていつまでも終わらないんでしょうか。

ツルコ 長く生きているなら知ってるだろう。人間、お前らが作った世界だ。

人間 すみません。

ツルコ なぜ謝る。

シン すみません。

人間 TRUTHCOさんは、いつからこの仕事を？

ツルコ 知らない。

人間 知らない？

ツルコ 人間は、自分が生まれた瞬間のことを覚えているのか？

人間 生まれた瞬間はさすがに、

ツルコ 人間は、いつ自分が自分だと気がついた？

人間 ……いつ、でしょうか、エエと、そう言われると、

ツルコ 私は私と気づいた時には回収していた。回収のために創られたから当然だ。この世界をいつ終わらせるかは、始めたお前らが決めるしかない。それを私に聞いてどうする。

シンがハッと見あげ、人間もドキリと空見上げる。

人間 大丈夫。あれはただの鳥の群れ。今はもう飛んでいません。自律型致死兵器は、ずいぶん昔に、君の時代にすでに禁止されたはずです。
ツルコ 自律型致死兵器？
人間 すみません、また独り言です。

シンと人間、空を見上げて。

人間 ああ、いい天気です。TRUTHCOさん、ほら。

ツルコ 空を見上げるより、回収屋は地を這う。

人間 空は見ませんか。

ツルコ 見る意味がない。

人間 最近ね、みんな空をよく見上げていますよ。

ツルコ 見上げたところで爆撃が回避できるわけでもない。

人間 いえ、太陽の船を望んでいるんです。

ツルコ ……太陽の船？

人間 救済の船、という噂です。

ツルコ デマか。

人間 エエと、どうでしょうか。

ツルコ 誰か見たのか。

人間 戦争はなく、緑は揺れて、空気は澄んでる。嵐も災害もない。川はずっと穏やかに流れながら空に浮かんでいる、あるかどうかともわからない輝く船：

…という希望が膨れ上がった噂です。

ツルコ 空に飛んでいるなら撃墜される。

人間 撃墜すると同時に地上も死の大地になるという怖い噂もオマケだそうで。

ツルコ デマだ。

人間 はい。それを信じてしまうのが人間なんです。

ツルコ 信じるのは自由だ。

人間 はい。ですからもしかしたらいつかは、

ツルコ いつかは？

人間 長いこと人間やってるから気づいちやっただですよ、アタシ。信じるものはなんとか、というやつです。

ツルコ 信仰を大事にしたい者はすればいい。

人間 いやそういうのでなくてねえ……

ツルコ なくて、なんだ？

ツルコ 誰かが思いついてしまったまだこの世にないものを、創ってしまえるのが人間が人間である所以なんじゃないかって……

ツルコ 人間。

人間 はい。

ツルコ 地区22だ。回収開始。

人間とツルコは、それぞれエアーの扉を開けた。

しばらく。

シンだけが空を見上げている。

シン この世界の、始まり……

まぼろは、じっと見ている。

シン なにが始まりだったんだろう。

ミサイルが飛んだ。

シン ファッションビルはsaleをしてる。バーゲンの垂れ幕は確か2025だった。ビルの向こうの空には赤い炎。いつだってミサイルは飛んでいる。だけど高級レストランはいつも満席。電車はたびたび止まる。夏はもう暮らせなくらい熱せられる大地。これ以上悪くなる前に、さっさと国を捨てるか、この星から逃げなきゃと誰もが焦ってる。だけどデバイスのぞけばサステナブルな記事ばかりでちよつと笑った、あれ、そもそも国ってまだあったっけ。保険はもう全部民間に移ってしまった。あらゆるものが民間に移って、街に出かければ流行りの服とメイクの女の子たちがビラを配って、あれ、国ってまだあったっけ。世界中いろんな国がその形と境界線を変えていく。もうどこどこが争っているのか、毎週入ってくる情報も変わって、どれを信頼すれば間違いないのかきつと誰も分かってない。分からないから自分の信じたい情報を信じろ。そしたら確かな情報よりも信じられる情報ばかりがデバイスに流れてく

る。信じたい世界がみんなそれぞれ違うから、世界がいくつも出来上がる。お気楽な動画配信は続いている。ホントとフェイクの見分けがつかない。またミサイルが飛んだ。あれもフェイクだと誰かが言った。ハンバーガーを食べて見上げる。世界の技術は毎秒毎に進化して人間の方が追いつけなくてウケる……って言ったような気がする。群れのように動く自律型致死兵器が鳥のように空を飛んでいく。自ら意思決定して攻撃が出来るドローン、なにこれ新しいゲームの話？ 違う、現実の話。信号待ち、人混みの中、知らない誰かが叫んだ。早く正気に戻る方法教えてよ……！ 人混みの中、こっちが知りたいとまた知らない誰かがつぶやいた……僕は唯一それがエンゲキだと思っていて、

ドン。

大きな音がした。

声1 再就職に向けて、希望が持てるような表現プログラムをお願いします。経験がおりなら問題ないです。音楽や演劇などの表現活動のワークショップが必須ですと、情報。

シン ……大事だなんて、生活と表現、みたいな、コミュニケーションと表現、みたいな、それに家賃が……来月の家賃……

ドン。

大きな音がした。

声2 これは感じる心を取り戻せるプログラムです。孤独にならない。自分で決める。己に問いかける。己に集中。心を燃やす。進化の速度は増していますのでツールとして最適ですと、情報。

シン 考えるから、ものすごく……俳優は、言われたことだけをやるんじゃない。自分で決めて、決めて、自分の体を通して、だから、ちゃんと感じないと考えないと……

ドン。

大きな音がした。

声3 忠実なだけでは今の時代では意味がなく、人間による確実な自己判断が必須です。演劇を経験している方が即座に自らで判断ができ、リーダーシップがとれるとパーセンテージが出ていますと、情報。

シン 知らなくて……よく聞くセリフだけど本当に知らなくて、これが、

ドン。

大きな音がした。

声4 空を見上げれば鳥の群れのように自在に飛び回るLAMS、ローズ。人間の生と死を、機械に委ねるべきではありません。進化するのは機械でなく、我々人間の方でなければ。戦争を非人道的にはいけませんと、情報。

シン ……人道的な……戦争……って、あつたっけ……？

ドン。

大きな音がした。

声5 個を尊重することで強い心を持った兵士が作れます。ひとりひとりの力が発揮できればクリアな各部隊が作れます。前回の大战の時とは比べ物にならない素晴らしい集団になりますと、情報。

シン 知らなかったけど、一瞬、感じた、違和感……耳の、後ろあたりによぎった、けれど、家賃のことを思い出したら消えていった……

シン、突如、おでこにトカレフを突きつけられた。

レジスタンス 人間は進化してるってことだよ、シンさん。

シン え。

レジスタンス 感謝してる。

シン あなたは……

レジスタンス 就労支援プログラムを受けた、ほら、

シン すみません、たくさんすぎて、僕だけでなくて、あの頃は、各地でも、本当にたくさんだったので、あの、お名前は？

レジスタンス ところでシンさんは賛成派？ 反対派？ 返事によっちゃあれがそれでこうなっちゃうかもだけど。

シン え、あ、僕は、反対って言葉を使うと、それも結局争いになるから、

レジスタンス だって戦争に人道的も非人道的もなくない？

シン それは、ええ、そうです。

レジスタンス 自律した機械の兵器に攻撃されるのも嫌だし、生身の兵士に攻撃されるのもごめんだし。だからあたしは平和を求めて抵抗するの。

シン なら、どうして……武器を持っているんですか？

レジスタンス あたし、どうしたいんだって考えて、自分で選んで決めたの。だから、あたし、ちゃんと声を上げる。

シン エエとそれはその……レジスタンス？

レジスタンス 始まってしまったものを、本気で止めるには仕方がないこともあるんだって、これも自分で考えて決めた。きつとね、これからみんなそれぞれが考えて自衛していく世界なんだと思うの。もう時代が昔とは違うから、

シン 待って、待ってください。考えたのにそれはおかしい、そんな、

レジスタンス おかしい……？

シン 僕も……レジスタンスです。だけど僕は、武器を持たないレジスタンスです。

レジスタンス この戦場で？

シン だから、

レジスタンス 5秒後に撃つって言っても本気でそう思える？

シン ……！

レジスタンス きっと世界ってどこでもこうなんだと思う。今生き延びているなら何かを誰かを殺してるんだよ。

シン ちが、

レジスタンス ピアーツィ。(5)

シン ……！

レジスタンス シンさん、あのプログラム面白かったねえ。

シン え………？

レジスタンス チイトウリイレン。(4)

シン ……

レジスタンス なんか場所とかだけ決めて、勝手にしゃべるやつ。相手の言ったことは絶対否定しないって、

シン あ、即興、

レジスタンス トウリー。(3)

シン ……

レジスタンス お芝居なんかナンも興味ないけど、なんかね、あれはね、あたしなんかでも自分で思ったこと、言ってもいいのかもしれないって思えた。

シン そうですね、僕らは自由に感じていいし考え、

レジスタンス ドウヴァ。(2)

シン ……

レジスタンス お前はほんとダメだダメだって言われ続けてきたあたしが、いいよ、それでいいんだって言葉、もしかしたら初めてかもしれない。だから、あたしにだって何かできる、一歩踏み出してもいいんだって思えて、

シン だけど踏み出す場所はここじゃないはず。どんな理由をつけても武器は否定しか生まない、

レジスタンス アジン。(1)先に言葉であたしを否定したのは、シンさんだよ。

シン え、

レジスタンス ありがとね。だけどさよなら。

レジスタンス、微笑んだ。

レジスタンス ノ(又)ーリ。(0)

シンはその時の自分を見たくなくて顔をおおう。

と、同時に。

エアーの扉が開く。

レジスタンスは消えた。

シンは、運転席と助手席に座り込んだツルコと人間を見た。

ツルコ 地区22、回収完了。運転オート。地区18まで。

エアーは音もなく進む。

ツルコ 書かないのか？

返事がないので、ツルコは前を向く。

シン、人間の様子を伺った。

シン 空気が……イガイガです。

人間 TRUTHOさんが、アタシが管轄未来の仕事の邪魔をしていると言ったんです。

ツルコ 実際そうだ。管轄未来のエアーにしがみついていた。邪魔だ。

人間 あれがいつも通りですか。

ツルコ 廃棄が確定したものは処理場へ。鉛系は工場へ。遺体、遺品は管轄が引き取る。私が聞き取った最後の言葉のデータはクラウドにあげる。

人間 まだ生きているあの赤ん坊は、

ツルコ 管轄未来の仕事。この業務は初めてだったか。

人間 あれからどうなるんでしょうか。

ツルコ 引き渡すまでが回収屋の仕事。

人間 TRUTHOさんは考えたりしませんか。

ツルコ 考えても、その仕事は私の仕事じゃない。

人間 生きていました。

ツルコ だから連絡した。すぐに到着して見届けた。安全だ。他に何が？

人間 転がってる焼けこげたお弁当箱。どっちの国か、どこの国のものかも分からなくなった手袋、靴、服、肉、赤黒い、塊。触れるだけで崩れる。全身が殴られるような二オイ。

ノートを広げ、ペンを握った。

しかし震えて、書けない。

人間　そこに、赤ん坊が生きているなんて……ありえない、奇跡みたいなもので、だから、

ツルコ　だから保護した。分からない。なにが問題だ？

人間　仕事作業の話をしてんじゃないんです。アタシは、あの赤ん坊がこれからどうなるのか、できることなら知りたい、会いにだって行きたいって思っちゃったんですよ。だって見つけたのはアタシらなんですから。

ツルコ　生きているものがあるかを気にしろと教わった。赤ん坊のその後の未来を気にしろとは、誰からも教わらなかった。

人間、驚いて黙った。

ツルコ　人間が何を憤っているのか、わからない。

ツルコ　そうか。人間は憤る世界を知ってるからか。

ツルコ　私はこの世界しか知らない。

ツルコ　どこの国の赤ん坊だろうが気がつけは大人になる。この世界にいるのなら、管轄未来が育て、どこかのセクションで働くのだろう。問題ない。

人間、思わずツルコを見た。

人間　TRUTHOさんは……

シンがその言葉をささぎった。

シン　僕らは何も言えないよ。

シン　今生き延びているなら何かを誰かを殺してここにいる。それが例え小指の爪の先ほどでも、僕らはこの世界を作ってしまった一部だから。あなたの後悔の僕は、今でもずっとここにいる。

シン 彼女にはどんな風景が見えているんだろう。

シン 赤と黒と灰色の世界。これが、当たり前前の世界。

シン 僕らに、わかるわけがないんだよ。

シン、人間の手を取り、ツルコに向ける。
手には、ペン。

人間・シン TRUTHOさんも。

ツルコ なんだ？

人間・シン 書いてみてください。

ツルコ 記録なら正確な音声データも映像データもある。

人間・シン いえ、仕事じゃない、あなたのこと、自分のことを。いつからここに
にいるのか。どうしてこの仕事をしているのか。いつから自分は自分なのか。
今いるここで、何を、感じられるのか。あなたのことを。

ツルコ、ペンをじっと見たが。

ツルコ 意味がわからない。私は人間が感じるギチギチ、ニガニガ、マガマガは
感じない。

まぼろはエアーを降りて、父の前の椅子に座り直した。

父 真剣な顔して、何言うか思ったら、

父、思わず。

父 ないで。うん、ないわ。これがほんまで、ないやろう。お母ちゃんは初めっから最後まで人間やったで。

笑ってしまう。

父 お前、もうええ大人やのに、ふいくしよんどごっちゃになったか？

しかしまぼろは笑わずに。

へエジをめくる。

まぼろ 子どもの頃は、これはほんまに、全部、お話やった。お父ちゃん。

まぼろは父を見る。

まぼろ お話ってどこから来るんやろう。

父 どこから、て、

まぼろ なにから浮かび上がって来るんやろう。

父、笑うのをやめた。

まぼろ お母ちゃんは、なにからこのお話考えたんやろう。なんでこのお話なんやろう。うちこれずっと読んでる。子どもの頃は、文字はそのまんま、書いてある文字だけで、書いてあるそのまんましかわからなくて、書いてない文字は、見えなかった、読めんかった、浮かび上がってはこうへんかった。

父 書いてない文字は……そら、書いてないから、ないやろう。

まぼろ 在る。

父 え？

まぼろ ほんまのことは、

まぼろ 想像のうらっかわ、作りもんの奥底、書いてある文字の向こう、もっと
もっと向こうに、

まぼろ 在る。

まぼろはノートに視線を落とす。

と、人間やってきて、

ゴロリと寝そべった。

そばにはもちろんシンもいる。

人間 どうも、立ち上がれなくなりましてね。

ツルコ 人間全般なら当たり前だ。

人間 心折れたわけでなくて、

ツルコ 心、おれる。

人間 エエと。この歳ですから……すみません。毎朝、目が覚めるたびに、ああ、良かった、今日も一日生きられる、と……本当にそんな毎日ですから……

ツルコ 回収は基本的に回収屋がする。人間がいなくても問題ない。無理する必要もない。

人間 無理してこの会社に潜り込んだので、無理したいんですけどねえ。

ツルコ ……

人間 何で、とか聞かない？

ツルコ 聞いた方がいいのか。

人間 エエと、できれば。

ツルコ 何で？

人間 新しい抵抗……ああ、言葉がよくないですね。新しい……シン 試み。

人間 新しい試みです。今、目の前にあるものを、細胞のひとつひとつに、刻み込む。匂い、温度、色、手触り、体にね、覚えさせる。台詞を、

ツルコ セリフ？

人間 昔、台詞を覚えた時みたいに、頭じゃなくて、体で、全身で、覚えて、だから、書き刻み込むんです。

ツルコ なんの話だ？

人間 頭で覚えたものは……なんて言うですかね、こう、う、上の方って感じで、エエと、

ツルコ なにを言ってるのか全く分からないが続ける気か？

人間 いつか薄れ忘れる感じがするんです。だけど体が、細胞が覚えると深くなる……どこまで深く刻み込めるか、もし、魂ってやつにまで刻み込めたら……

ツルコ 何度も言うが記録データはいつでも閲覧できる。

人間 「もうあなたは知っています」と、刻み込む試みです。

ツルコ あなた。

人間 この痛みはもう知ってる。この傷はもう知ってる。赤と黒と灰色の世界はもう身に染みて。流れた血はあなたのものでした。焦げた肉はあなたでした。

潰れ、弾けた体は、それも、あなたでした。

ツルコ 人間、お前の話には一貫性がない。

人間 ように思えて、これはある一つの可能性かもしれませんが……刻み込むのは、「もう嫌だ」じゃなくて……「もう知ってる」……46億年を十月十日でやるのが人間なわけですから……

ツルコ バイタルが不安定だ。

人間 アタシが記憶して刻み込んだものも、46億年の進化にちよいと入れてもらえないでしょうかねえ……必要ないものがなくなっていくのが進化ってやつなわけで……それ知ってる、やった、でも、いらなかった……

ツルコ 大丈夫か？

人間 どのくらいかかるでしょうか……アタシ、気が長いんでね……待ちます……100年じゃ足りない……1000年……1万年か……10万年……

ツルコ 人間、あまり喋らない方がいいのかしれない。

人間 ……大丈夫……死ななかつたら、長期休暇をもらうことにします。

ツルコ 今からでも取ればいい。休暇中何をするつもりだ？

人間 エエと……？

ツルコ そう聞いて欲しいのかと。

人間 すごいですねえ。おもんばかっている……急成長です。

ツルコ 別にバカじゃない。

人間、少し笑った。

人間 死ななかつたらですねえ、はじめたいことがあります。

ツルコ ならすぐにやればいい。何を？

人間 こういうのを……

人間、ノートを広げて見せる。

簡単なデッサンでもあるのだろうか。

人間 背中に背負って旅に出ます。

ツルコ 洒落てるな。仏壇か？

人間 劇場です。

ツルコ 劇場。

人間 アタシの手でも作れるくらいの小さい背負い劇場……ランドセルみたいに背負って……小さい人形が役者……仲間は、もう逝ってしまっただけ、人形なら先に死ぬことも……あ、笑っていいですよ？

ツルコ なぜ笑う？ 当たり前だ。人形は死なない。壊れるだけ。

人間 出会う人出会う人に、劇をね……観てもらいます……

ツルコ 聞いていいか？

人間 え？

ツルコ それをして何になる？

人間 ……人間が……あらわれます……

人間はノートにペンを添えて、ツルコに差し出す。

人間 もらってください。

ツルコ、じっと見る。

人間 まだ半分以上白紙ですから。

ツルコ、差し出されたノートとペンに、少しだけ触れてみた。

触れてみただけで、もううつもりもなかったはずが、

人間 もらってください。

シンが、ノートとペンをツルコの手にしっかりと握らせた。

ツルコ ……もらったほうが、いいのなら。

人間 また急成長ですね。

ツルコ、ノートを見る。

さほど意味はないが、不意にひっくり返す、と。

ツルコ ……SIN……シン……？

書かれた文字を読んだ。

人間 アタシの名前です。

ツルコ この綴りで？

人間 若い頃は、信じるの信と書きましたが……

ツルコ が？

人間 自分で書き換えました。

ツルコ ビリイヴから、罪に？

人間 はい。

ツルコ これは……人間、お前だけの名か、それとも人間全般の名か？

人間 TRUTHOさん。次の仕事のお時間です。

ツルコ 知ってる。

人間 後から追いかけますよ。

ツルコ 起き上がれるのか？

人間 いいえ。無理でしょうね。だからせめて気持ちだけでも一緒に。追いかけて、見ていたい気持ちです。TRUTHOさん。あなたはこれから、どんなことに気づいていくんでしょうかねえ。

ツルコ 気持ちとは、それは見えるものか？

人間 見えません。だからいつもみたいに、横にいと、本当にそこにいと、想像してみてください。

ツルコ だけどいなきが事実だらう？

人間 どうでしょうねえ……

ツルコ、人間をじっと見ていたが。

さっと踵を返し、エアーに乗り込む。

もちろん、まぼろも後部座席に乗り込んだ。

ツルコ 運転オート。地区33まで。

エアーが音もなく発射する瞬間、
助手席にシンが乗り込む。

シン 見えませんか。

シン だから横にいと、本当にそこにいと、

シン 想像してみてください。

ツルコ ……もうあなたは、

シン え？

ツルコ もうあなたは知っています。

ツルコ この痛みはもう知ってる。この傷はもう知ってる。赤と黒と灰色の世界はもう身に染みて。流れた血はあなたのものでした。焦げた肉はあなたでした。潰れ、弾けた体は、

ツルコ、エアーの窓から外を見た。

ツルコ もう嫌だ。じゃなくて、

シン、ツルコを見た。

シン それ知ってる、やった、でも、いらなかった。

ツルコは気づくわけもない。

ツルコ ……人間が……あらわれる……

エア―は音もなく進む。
が、突如、

ツルコ 止まれ。

シンは驚いてツルコを見た瞬間、
エア―は静かに止まった。

まぼろ うち、ここが好き。

ツルコ 泣いてる……？

まぼろ 聞き逃さへんこの一瞬が好き。

ツルコ あっちから、

ツルコ、じつと耳を澄ます。

シンも耳を澄ます。

シン 転がってる焼けこげたお弁当箱どっちの国かどこの国のものかも分からなくなつた手袋靴服肉赤黒い塊触れるだけで崩れる全身が殴られるようなオイそこに赤ん坊が生きているなんてありえない奇跡みたいなものだから、

確信を持って。

ツルコ やっぱり聞こえる。

シン また急成長ですね。

まぼろ 泣いてる赤ちゃんの声が遠くに、ほんまに聞こえてきそうなこのペエジが、一番好き。

一瞬の呼吸、その後。
3人同時にエアールから飛び出した。

影、暗闇から、
聞こえてくる。

呼吸。

吸って、吐く。

足音。

右、左。

浮かび上がるツルコ。

赤ん坊を抱いて。

歩く。

歩く。

歩く。

ツルコの言葉と、

まぼろとシンの言葉は、

同時に聞こえる。

全ては同じ時の流れ。

まぼろ エアーは乗り捨てた。

「踊る……………違う。」

シン ギチギチする。

「胸、膨らむ、違う。」

まぼろ 管轄未来には連絡していない。

「胸、なでおろす、違う。」

シン ニガニガする。

「胸……ムカつく、胸がたつ、胸にくる、違う、」

まぼろ あらゆるネットワークを切った。

「胸、胸、不安、胸、無力、胸、困惑、」

シン マガマガする。

「…違う。胸……胸、胸、」

まぼろ 案外重くてじわりと熱い。

「欲望、失望、絶望、嫌悪、恐怖、後悔、嫉妬、空虚、服従、軽蔑、憤慨、自責、不信、恥、悶絶、落胆、執念、憂鬱、躊躇、驚愕、興奮、愛憎、快樂、歡喜、善意、悪意、反感、共感、樂觀、悲觀、勇氣、羨望、慈悲、慈愛、尊敬、愛、幸福、希望、」

シン ギチギチする。

「胸、胸、胸………」

まぼろ 何をしているのか意味がわからない、だけど、

「いたっ………」

シン ニガニガする。

「いたい………」

まぼろ いつからここにいいのか。

シン マガマガする。

「胸、痛い。」

まぼろ どうしてこの仕事をしているのか。

「胸、痛い。胸、痛い。胸、痛い。」

シン ギチギチ。

「胸痛い、痛い、痛い。」

まぼろ いつから自分は自分なのか。

「泣き声が、痛い。」

シン ニガニガ。

「赤ん坊は、泣く。」

まぼろ 今いるここで、何を、感じられるのか。

「生きのびたくて、泣く。」

シン マガマガ。

「泣いている間は、生きている。」

まぼろ・シン あなたのことを書いてみてください。

ツルコ、今、目の前に在るものを見た。

まぼろ・シン あなたはこれからどんなことに気づいていくんでしょうか。

目の前には、

自分の手のひらに乗った、おにぎり。

ツルコ 私……私は、

そして、屑。

屑 あなたは……

窓をのぞくのは、やっぱりシンだ。

まぼろは、ノートを見つめている。

まぼろの向かい側の椅子には、

父がいる。

屑 あなたは、人間じゃ、ない……？

ツルコ そうだ。

屑 僕は、その、屑だから屑って、そういう、

ツルコ 違う。そのまんま人間じゃない。何も感じないから。

屑 そう、ですか……？

ツルコ そうだ。

屑 だけど、

ツルコ そうじゃなきゃならない。何を見ても何を聞いても何に触れても人間なら何かを感じるはずなのに感じないんだから人間であっちゃいけない……

…!

ツルコが目から、ぱたぱたと涙が溢れている。

屑 じゃあ、

まぼろ これがお父ちゃんで、

屑 泣いてるのはどうして？

ツルコ 泣いてなどいない。泣く理由を何も説明できない。これがどこからやってくるのかも知らない。なぜ勝手に流れるのかもわからない。止められるものならとつくに止めている。私はなにも……なにも知らない………!!

まぼろ これがお母ちゃん。

屑 ……だけど、それなら、

屑 もし、人間でないはずのあなたが、勝手に涙溢れて流れてくるなら、

屑 それはもう……奇跡ってことに、なりませんか？

赤ん坊が泣いた。

ツルコは赤ん坊を見る。

手を伸ばして、

抱き上げた。

パタリと、まぼろがノートを開じた。

窓から見ていたシンは、

ふっと姿を消す。

まぼろ この続きを想像してみたけど、いつともなんも思いつかん。

父 「おしまい」まで行きついたらその先はないやろう。

まぼろ お父ちゃん。

父 お母ちゃんは人間やし、お前は拾ってきた子でもないし、これだけは絶対言
うとくけどお父ちゃんは屑やない。カスや。

まぼろ おもんない。

父 すまん。

まぼろ この次のペエジ、破いたアトがある。

父、チラッとだけ見て。

父 ……ええ？ そんなんあるか？

まぼろ 丁寧にうまいことしてあるけど、ちよつとデコボコしてる……

父 そうかあ？ いや？ これ普通やろ。こんなもんこんなもん。

まぼろ、なんだか気が抜けて、

笑いが込み上げてしまった。

まぼろ もお……ええわあ……！

父 なんや？

まぼろ お父ちゃんはほんまお父ちゃんや。もおええ、そしたら行ってきます。

父 なんつや、読み聞かせといて、えらいあつさりやな。

まぼろ もうそろそろ日が昇る。

窓の外、

朝焼けが始まった。

父 キレイやなあ……

まぼろ お父ちゃん。

父 うん？

まぼろ ホンマはいっただけ、お母ちゃんの記憶あるねん。

父 ……そんなん初めて聞いたで。

まぼろ 初めて言うた。

父 なんて黙っててん。

まぼろ 子どもはホンマと夢の境目があいまいで、ずっと夢やと思ってた。なん

か……キラキラしてた。灯りが、四角い箱。小さい人形、動かす指先は、柔ら

かかった、途切れ途切れの、夢みたいな、

父 ……それから？

まぼろ それだけ。

父 なんつつつやねん。

まぼろ だから言うほどのことでもないやろ。お父ちゃん。

父 なんか。

まぼろ うちとお父ちゃんだけが、太陽の船に乗ったん？

父は、まぼろを見る。

父 見てきたらええ。

父 もう子どもやないから。

父 誰もお前の成長を止められへん。

家の中に、朝の光が溢れ始める。

黙ったまま、

まぼろはトランクを持って、

父にゆっくりと一礼した。

扉が開かれ、

光はもっと眩くなる。

まぼろは、その一步を踏み出す。

父は、しばらく見送った。

どこからか。

歌が聞こえる。

アメイジンググレイス。

罪人たちの歌。

父は、椅子に座る。

そうしてかつての自分たちを見るだろう。

屑は小さな乳母車を持ってきて、

赤ん坊を寝かせる。

ツルコはノートを開く。

ペンを取り、

何かを必死で書く。

屑が握ったおにぎりをも、二人は食べた。

きつと相変わらず遺体から剥ぎ取っている。

屑が何かを抱えてやってきて、テーブルに置く。

ツルコはそれを、

切ったり、

貼ったり、

ひつつけたり。

何かを作る。

四角い何か。

それは、

人間からもらったノートに書かれてある「背負い劇場」
最後に、くるくると、電球を飾り付けて、
屑は、スイッチをONにした。

パッと、灯り。

劇場の周りを照らす。

二人は、乳母車の中まぼろを見た。
きっとケタケタ笑っているだろう。

テーブルの上に、

完成した背負い劇場、舞台にはツルコと屑とまぼろの人形。

ノートとペン、

空の皿、

生活をそのままに、

乳母車を押して、ツルコと屑はこの家の扉を開けた。

どこからともなく聞こえていたはずのアメイジンググレイス。

いつのまにか途切れた。

背負い劇場の灯りだけが輝く。

父、ごそりと、ポケットから数枚の紙を取り出した。

それは新月。

暗い夜。

荒れ狂う風と雨。

暗闇の中に、背負い劇場の灯りだけ。

バンツ……と、扉が大きく開かれた。

ツルコ、雨に濡れ顔に張り付く髪。

恐ろしいものでも見たように、

呼吸が乱れている。

息が乱れたまま、テーブルのノートを開いて、

座りもせずに、ペエジをめくって何かを探しているよう。

「ツルコオ……!」

遠くから声が聞こえる。

「ツルコオ……!」

屑の大声。

「ツルコオオ……!」

悲痛な声。

少しだけ大きくなったまぼろを毛布に包んで抱いて。

屑も扉を開けた。

屑 ツルコ……! なんつつつで……!?! もうちよつとで「太陽の船」に乗れ
るところやったのに……! こんな偶然、今度いつあるか、

屑は呼吸を整えようとするが、止まらない。

屑 ほんまに運やねんって……お金積んだって無理で、今までなにしてたとか関係なくってただ出会えるかどうかだけ、ツルコ、今乗らんと、いつ停泊して、いつ出港するか、ほんまにわからんから……！

ツルコはノートのなかに見つけた。

ツルコ ……あった。

屑 戻らな、今やったらまだいけるから、

ツルコ 「人の心は暗闇の森ですから」

屑 え、なんて？

ツルコ 一緒には行かない。

屑 ……は？

ツルコ あなたとまぼろ、二人で乗って。

屑 え、なに言うてんの……？

ツルコ、自分の右手を見つめてから、

ふっと胸に当てた。

ツルコ この暗闇の森になにかいる……

船に乗り込む人々の声がする。

「荷物持ってたら乗れへんって」

「マジで」

「知らんけど」

「どんな大事なもんでも？」

「持たん方がええかも」

「唯一の条件」

「ほんまに？」

「らしいよ」

「噂やろ」

「身、ひとつだけって」

「手を離れたらあかんよ」

「いた、誰か踏んだ」

「あ、すみません」

「ちよっとこれどういう順番？」

「誰か整備とかしてる？」

ツルコ 人が、人がたくさん、たくさんいて、

屑 おるよ、そんなん、みんな乗りたいねんから。

ツルコ でもどこが入り口か分からなくて、

屑 あんだけ人おったらそうなるって、それが、

「どっから入ったらええんよ？」

「あっちやうん？」

「違う、こっち」

「いや、むこうみたい」

「え、どっち!？」

「分からん!」

ツルコ 熱気が、すごくて、誰かが走り出したら、そしたら、みんな走り出して、

あ、出遅れた、あ、だめ、置いていかれる、私、あ、あ……

ツルコ、右手を突き出して何かを掴む。

ツルコ ……ドロリって動いた。

屑 ツルコ？

ツルコ 走り出した誰か、目の前の、よく知らない誰か、私たちと同じような誰か、私、思わず、髪をつかんだ……

ツルコ、自分に驚いて手を離す。

ツルコ 赤と黒と灰色みたいなドロリ……
屑 ちよつ、待って、僕にわかるようにちやんと、
ツルコ 私……誰かの髪をつかんで引つ張った……邪魔だつて、そこをどいて、
力いっぱい押して、まぼろくらの女の子の泣き声もいろんな叫び声も聞こ
えただけ無視して、あ……

ツルコ、今、何かを思い出す。

ツルコ 私、何か柔らかいものも踏んだかもしれない、足の裏に感触、
屑 ツルコ、

ツルコ でも見ないようにして、行かないや、走って、早く早く早く、まぼろを
……早く、船に乗せてあげたくて……

屑 ツルコ、あんないっぱい人おったら、誰でもそうなるし、僕も、

ツルコ あれが当たり前なら赤と黒と灰色はずっとずっと終わらない。

屑 あかん、ツルコ、座って、

屑はツルコを落ち着かせる。

屑 感じすぎたらあかん。お願いやから、おつきいことやなくて、もっと、ちっ
さい、ちっさい僕らの生活のことだけ考えよう、

ツルコ あの子の……まぼろの体があったかいつて、もうちゃんとわかる。指先
から伝わる。まぼろが笑うと空気も光って震える、わかるようになった。ちゃ
んと肌で感じ取れる。寝顔を見ているだけで勝手に頬が、ゆるんでいること
だつてもう気づける。

ツルコの震える指先を、屑が包み込んだ。

屑 うん。ツルコはちゃんと人間やから。

ツルコ 人間……

ツルコは、気づいてしまうのだ。

ツルコ 愛しいものが増えると、こんな醜い自分も増えていくの？

またペエジをめくり、探しあてる。

ツルコ 「助け合うのに殺し合う」どっち？

屑 ツルコ、

ツルコ 「ビリイヴから罪に」

屑 ツルコ、

ツルコ 「これは人間お前だけの名かそれとも人間全般」

屑 ツルコ、それ置いて。

ツルコ 人間になりすぎた……

屑 え……

ツルコ この子のためなら世界も焼き尽くせる。

ツルコ、つかんだ手をじっと見つめる。

ツルコ 私が育てたら……私みたいな人間になる……？

屑 ツルコは、ただ思ってるだけで、なんもしてへん。ツルコそっくりになったって、ええやんかまへん問題ない、けど、このままここにおいたら、遺体から剥ぎ取るのが当たり前の屑になる。やから太陽の船に賭けてるねん……！

屑 ツルコの手を引っ張った。

屑 行こ。

ツルコ、動かない。

屑 ツルコ！

ツルコ 大声出さないで、起きるから。

屑 今乗らんと、

ツルコ だから早く行って……！

今度は屑が、

屑 ……わかった、

何かに気づいてしまった。

屑 もう一緒におる気、ないんや……

ツルコ だけどずっと愛してる。

屑 なんそれ笑えるんやけど……

泣きたいのか、怒りたいのか、

屑 めちゃくちゃ意味分からん……一緒にはおらんけど愛し、え………なに………？わからん、もう、なんなん？なんつつつやねんっ………！！

ツルコ、テーブル上の「背負い劇場」を見た。

ツルコ ……あらわしたい……

屑、ツルコを見た。

ツルコ この暗闇の森になにが潜んでるのか、知らなきや………もうなくてもいい、もう知っていますってなるくらいに……見て、知って、書き、刻んだものが、46億年の進化に入り込んで、必要ないものがなくなっていくまでに100年じゃ足りない、1000年、1万年、10万年、

が、

屑 ……あかん。何言うてんのか、なんもわからん。

もう疲れてしまった。

屑 ……僕は、罪悪感でおにぎり握って許されたいとか思う屑やけど、醜い自分を、嫌って……嫌ってほど感じながら、愛しいものそばにおる方を選ぶ。

ツルコは、

ツルコ まぼろに愛してるって伝えて。

眠っているまぼろを見る。

屑 絶対伝えへん。

屑は扉を開けて、

太陽の船へと走りだした。

ツルコはひとり、椅子に座る。

ふっと、窓の外。

いつしかシンのぞいている。

もちろん、ツルコには見えない。

ツルコは、ピカピカ光る背負い劇場をじっと見ている。

ツルコ、テーブルの上のノートとペンを持ち、

「背負い劇場」を背負った。

ちよっと滑稽だ。

ツルコも扉を出る。

屑とは反対の方向に。

ツルコの後を、シンが追いかけていった。

数枚の紙と、父だけがそこに在る。

最後の一枚を手に、

父は小さく呟いた。

ツルコの手紙だろう。

あなた。

可愛いあなた。

一番小さな小指。

あなたの小指、

あなたの足、

あなた。

いま、どこに立っていますか。

あなたの足の小指、

あなたの足の裏側、

あなたは、

いま、どこに立っていますか。

どんな土塊を、

その足で踏みしめているでしょうか。

恐れ of 土塊に立てばそのように。

怒りの土塊に立てばそのように。

痛みの土塊に立てばそのように。

憂いの土塊に立てばそのように。

あなた。

可愛いあなた。

できれば、

愛しい土塊を、その足でしっかりと踏みしめて。

それならきつと、

そこから見えるものは、

そのように。

たとえ青い空でなく赤と黒と灰色の空だったとしても、

そのように。

すべての土塊が愛しいものとなるように。

わたしは今日も背負ってどこかの荒野を歩くでしょう。

あなた。

わたしを覚えていないあなた。

わたしを忘れてしまったあなた。

そうしてきつとわたしを憎んでいるあなた。

この言葉、
届かずともこの言葉、
いつまでも在るでしょう。
気づかれなくともこの言葉、
ただここに、
在り続けるでしょう。
確かにここに。

最後の数枚、それをまぼろは手にしなかった。
しないまま、まぼろは歩く。
まぼろのずいぶん先には、
ツルコが歩いているのかもしれない。
隣にはひっそりとシンも歩く。
ツルコのそのずいぶん先には、
人間が歩いているのかもしれない。
彼らは歩いて歩いて、
その姿はやがて見えなくなるだろう。

さて、この1冊のノートは、
どこからやってきたか。
それをお伝えして、
この始まりの物語を終えましょう。

ドラアグ ただの屑さん。

屑、驚いて振り向く。

屑 あの……

ドラアグ ヤダ良かった。振り向いた。んー、まあまあいい趣味。やっと見つけた。屑さん。嗚呼、屑さん、感無量。

屑 あの、すみません、その名前はここでは、それにもうずいぶん使ってなくて、ドラアグ ツルコから頼まれたの。

ドラアグ、一冊のノートを屑の目の前に。

ドラアグ 「太陽の船に乗れたなら必ず見つけだして渡して欲しい」

屑、ノートを開く。

屑 ツルコの文字……

ドラアグ ここまでくるのホント大変だったのよ。一晩中喋り倒して聞いて欲しいくらいだけどそれはまたの別の機会に。ホント、あの女、マジクソ。でも愛してる。

屑 あなたは、

ドラアグ 世話になった。ホントに。恩を返せてこれでチャラ。

屑 あの、ツルコは、今、

ドラアグ だめ。

屑 えっ、

ドラアグ 何も言えない。ごめんね、ツルコとの約束だから。そんな顔、よして。言っちゃいたくなる、でも、ダメ、許して。

ドラアグは、文字通り、dragして歩いて行った。

屑はそれをパラリと開く。

じっと見つめ、

顔を覆い、

何かになづき、

最後のペエジのいくつかを破き、ポケットに押し込んだ。

そうして食器棚の下に、そのノートを突っ込んだ。

ノートは幼いまぼろが気がつくまで、

ひっそりとそこに在る。

昔の序と云い切れず おしまい